



四季
類
紙
繪
家
所
記
新
葉
草
秋



まじく人を出せしものこらうてまじり
起情の情なきなり

嗚くも風を吹く雲を有る
鳥の鳴きをばも聞きし

山を渡りし鳥の鳴きをばも聞きし

賢者の考へるは向うのこころのよきこと
未だを知らずして情を起して賢者のまじり
にむかひし鳥の鳴きをばも聞きし
何れはしるべきこととて極むるも
をばも聞きし

初夢三三三かしをばも聞きし
て賢者のまじりしをばも聞きし
とて賢者のまじりしをばも聞きし
向のこころのよきこととて極むるも
をばも聞きし

是を人の情

あまのこころをばも聞きし
温石をばも聞きし
行燈の外よりまじりし

此賢者のまじりしをばも聞きし

四季 廿二歳時記新菜草

併諧歳時記新菜草 卷之三

京都 山口素楊 編輯

七月

い

池之坊立之花

活の更法を雲
林院の三条の事

日用堂の三十三所順礼の事
一龍の中にて由緒の事
立花の事
生身魂

蓮の飯 問商倭筆
刺 鱈 佛香

行の盆願願はくは現在の父母を
切苦願の事

父母壽命長久を祈る事
刺鱈中元の日は親類を祀りし

礎て割開きこれを軀にして二枚を重とあし
刺し入る

附合

七月

い

百廿五

たふらを用てすく可き

○寒中連終る車

前

山田の山田社子端を刈以
夕月とあられくはる四十雀

是ハ景もをを延ましく云へは八休
こひの時常あり

夕月年わくはるはる四十雀

秋をさききいてすく

是は景もをを延ましく云へは八休
情を向りせくはるを起し一まへ
を八休く白観あり

秋をさききいてすく

目塞くくはるはるを起し

是ハ景もをを延ましく云へは八休
情を向りせくはるを起し一まへ
を八休く白観あり

附ハ八休く白観あり

目塞くくはるはるを起し

秋をさききいてすく

是ハ景もをを延ましく云へは八休
情を向りせくはるを起し一まへ
を八休く白観あり

是七名白向折

晴るくすく声のまは油を

三又つるく声のたそくれ

是ハ油を賣りしをては時とくはあし
らひ折る三又折るをてはあし
一白の假あり

是七名白向折

鯉 名伊和之性柔弱故之体字弱之以、與和之訓
乃ち相通之中、群行して、海濱に宿る、漁人

豫知して網を下し獲る、鯉好く、網を食ふ、

以て者、數万群をなす、浪濤の、一、是を、

腹を、腹、多、く、食、ふ、又、腹、を、腹、油、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、腹、を、

附合

七月

は

百廿七

鳩吹

鳩をとりて、吹く、

鳩をとりて、吹く、

鳩をとりて、吹く、

鳩をとりて、吹く、

鳩をとりて、吹く、

鳩をとりて、吹く、

鳩をとりて、吹く、

鳩をとりて、吹く、

鳩をとりて、吹く、

是の行 是の行 是の行 是の行

是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮

是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮

是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮

是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮

是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮

是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮

是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮

是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮

是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮 是の夕暮

三文書會 彈塗魚 俗に波世 川の末海 近き所と多くあり

琴 西の村上の書と並く 註 延喜十五年の例和琴

新綿

二百十日

廿六夜待 廿六夜待 廿六夜待 廿六夜待

星合 星合 星合 星合

星合

本願寺の籠の化 本願寺の籠の化 本願寺の籠の化

本願寺の籠の化 本願寺の籠の化 本願寺の籠の化

此の句は... 打越の句も... 人の句も... 世の句も... 世の字極く大事に

是八体白甘の句... 是八体白甘の句... 是八体白甘の句... 是八体白甘の句...

是八体白甘の句... 是八体白甘の句... 是八体白甘の句... 是八体白甘の句...

是八体白甘の句... 是八体白甘の句... 是八体白甘の句... 是八体白甘の句...

四季 非昔哉寺已所天章

盆市 草市、荷の葉賣。 記事 凡 麻からくして。

風仙花 時珍曰子花... 作餅或大鼓よを愛

木瓜の實 和漢三才圖志 木瓜と 記事 凡 木瓜の實

鬼灯 同上 時珍曰子花... 記事 凡 鬼灯

南瓜 時珍曰南瓜の種... 記事 凡 南瓜

兼二秋物 星月夜 記事 凡 兼二秋物

兼二秋物 弁慶草 記事 凡 兼二秋物

布瓜 時珍曰瓜... 記事 凡 布瓜

燈籠 音義 記事 凡 燈籠

附合 七月 一と 百二十

二の尾近き... 是前白の昔を... 古ま... 大内... 都近... 見...

二の尾近き... 七の限の門... 前白尾... 七の限... 作...

是八体... 七のう... 前白... 七の限... 作...

前白... 七のう... 前白... 七の限... 作...

るの... 頭... 女...

前白... 七のう... 前白... 七の限... 作...

是... 女... 前白... 七のう... 前白... 七の限... 作...

是... 女... 前白... 七のう... 前白... 七の限... 作...

定... 鳥屋勝... 鷹新毛...

鳥屋勝

全... 情... 神武天皇... 秋津海...

情

神武天皇... 秋津海... 富草の...

富草の

花... 頰桐... 大和本草...

花

頰桐

菟麻

番椒

中元

地蔵祭

附合

七月

ち

地蔵祭

附合

七月

ち

地蔵祭

附合

是八休白の寸白也

是神の初め頃の終極

是前白の末頃の寸白也

保昌の任もまやこぬらん

此の句保昌の丹後の國の守りなり

附の意は前白の兼管使を丹後より

是前白の寸白をくもて一句の

偏をくは法ニ

ま

はらら若白し山吹の夜

前白も打おしの花山吹くくくく

是七名曰拍子

源順詩云如燕粟俗呼為女身者是之

若草の風

若草は若し草也

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

若草の風

部類 伊詩 嵯峨 時 詩 氣 葉 草

廻文

々々たんとのもも草の酒の富田酒 其酒
は生者必滅すまふ不滅とて之を
廻る

さうる在る又さうるの始のり 古昔
新白のいそはてまてつる
白をせしむる手れはりて
今新白のいそはてまてつる

芭蕉翁古池之句傳

半半若若翁根本寺佛頂長老
博覽大悟のそ懐のそ懐 極老の
舊文の跡のそ懐のそ懐 極老の
長慶寺の跡のそ懐のそ懐 極老の
極老の跡のそ懐のそ懐 極老の
を供へてのそ懐のそ懐 極老の
を供へてのそ懐のそ懐 極老の
を供へてのそ懐のそ懐 極老の

之原者大小原也小原まてまて
内に入道日何所者極老のそ懐のそ懐
通波のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
昔のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
池邊のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
を供へてのそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
持のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
其長老席上のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
本分を相たはるそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
會のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
一心は界法界一人のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
子のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
法界のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
了實の極老翁のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
善のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
謹のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
風聲のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
水音のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
澄のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

ともはるのそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
残暑 秋暑 山谷詩 西風挽不來残暑推不
去 樹をてまてつるのそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

後のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

粟奴

同上 粟の苗の穂をまてつる時思ふ
焼をまてつるの穂の奴夢の類也

虫

同上 俗字響虫正字詳あるは極老のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

蛸

同上 俗字響虫正字詳あるは極老のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

葛

同上 俗字響虫正字詳あるは極老のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

蕨

同上 俗字響虫正字詳あるは極老のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

花壇

同上 俗字響虫正字詳あるは極老のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

花

同上 俗字響虫正字詳あるは極老のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

草

同上 俗字響虫正字詳あるは極老のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

草

同上 俗字響虫正字詳あるは極老のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

花

同上 俗字響虫正字詳あるは極老のそ懐
のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐のそ懐

古池之句傳

七月

百四十

三字

北	大	平	貴	愛	鞍	伏	木	梅	桂	高
野	内	布	布	岩	馬	見	幡	津	雄	雄
聖廟、梅、新向松、	揚	社、夜梅	社、川、螢	檜ヶ原、かきけ枝	修心谷、千枚梅、炭、木の芽漬、石、番町し	里、持衣、綱舟、海菜物、花火、笑、里、茶園、	宮、川、製紙場	所所、川、鮎釣	初釜、礪石、打盤、	初釜、礪石、打盤、

又みまの二日を繰りくり再の 蕪三秋物 篠

芒 宗祇曰志のまきとていしは蕪といつての薄をいふ

忍草 志園翁云志のふ草ハ和名杓の苔の類

鹿 拾物論鹿の性怒烈

鹿 多し能良子を飼つ

鹿 鹿の角ハ春生し夏長し秋墜く冬統牡

鹿 鹿の角ハ春生し夏長し秋墜く冬統牡

鹿 鹿の角ハ春生し夏長し秋墜く冬統牡

鹿 鹿の角ハ春生し夏長し秋墜く冬統牡

鹿 鹿の角ハ春生し夏長し秋墜く冬統牡

吉	音	靛	糺	小	祇	稻	八	小	巨	入	笠
田	羽	圃	塩	坂	園	荷	坂	倉	掠	幡	置
社、神樂岳、	湯、山、梅、清水之	水、山、花	表、涼、ミヅ川	山、花	社、香條梅、赤梅、	社、山、草袴	塔	山、紅葉、時雨亭	湖、蓮、茅草、菱	白鷺、小龍、鯉	男山、社、梅、

て鶴々音 声をまを村民云田鶴の化も処○時珍曰
 今田野の間ふらふらありいす酒ふらふらとききく
 あり和俗云云梅まらるる俗時字を用ふ蓋田
 の二字を製するなり ●時突網 職業書下巻園菰原
 辺原中時のおり存る動らひるを七八間隔て竿網
 を持て時のおり向ひぬらひをけあらしめり
 と廻り最初ハ大輪と申す近寄るすに時
 めらしめ止らるる近らありて竿網を投て
 是を時突網と云 ●時の雨梅 和訓栞鶴曰昔
 時を志まらるる音のさしめりいふにさしめり
 百羽梅も梅梅もす時天と云々そのさしめり
 曉の事いふありと云 ●梅の肴種 同上俗語
 その田次は時時の宗 九万疋 和俗云云
 然あるをいふなり 未詳俗云志比良
 長崎の人等比以手と云梅まらるるに鶴と敷いて頭
 く鶴細うり味も又敷く梅まらるる者二三尺九万疋と
 名くそららるるをいふなり 越中 鯉
 養を止らるる相傳く云中華の魚にして四五尺
 度取らるる入新の時等々 群遊す唐船
 とき九尺の鯛有る人肉令の腹さしめを慕ひ

堀	江	長	玉	鳴	有	芦	水	敷	廣	高	箕	津
江	柄	江	尾	馬	屋	屋	津	津	田	津	田	守
臨、江、つ、く、し、 み、ま、ふ、 み、ま、ふ、 里、播、人、拉、	沼、五、月、雨、芦、 か、ま、	温、泉、敷、尾、 里、浦、子、ま、釜、 里、山、橋、衣、	網、引、さ、砂、地	社、山、虫、	社	滝、杉、 峯、の、庵	神、浦、伊、底					

上、江、し、経、を、痛、し、中、央、に、持、つ、の、供、物、を、備、ふ、と、
川、流、を、修、る、川、の、修、り、は、名、譽、を、流、す、
撰、待、門、茶、往、來、の、人、に、茶、を、施、す、
焼、大、文、字、火、鳥、居、の、火、
室、町、家、繁、昌、の、日、遠、望、遊、觀、の、た、め、お、ま、せ、
一、条、通、を、正、面、と、ま、一、説、延、徳、元、年、七、月、十、六、日、相、面、
撰、川、の、尚、始、て、お、ま、せ、を、作、る、は、お、軍、義、尚、追、悼、の、意、
此、外、北、山、松、ヶ、崎、の、妙、法、の、を、と、し、舟、山、の、舟、形、の、
愛、宕、山、の、石、形、の、火、を、と、し、活、か、し、の、意、也、
在、人、麻、を、と、し、を、と、し、を、と、し、
の、意、也、
剪、紅、羅、花、の、形、刻、し、有、る、小、刀、或、ハ、鍔、を、以、て、
さ、ら、し、秋、の、花、を、と、し、教、を、と、し、
二、む、し、寺、を、と、し、珍、花、を、と、し、
寺、を、と、し、
名、所、地、名、
七、月、せ、す、
百、五、十、二、

關	江	以上	三	伴	堅	矢	大
野	口	播	上	吹	田	走	津
所、持、氷、室、 あ、り、 舟、	浦、泊、 船、 藍、福、除、	百、足、山、 山、艾、 藥、草、	浦、浮、 堂、 芦、 厚、	山、艾、 藥、草、	浦、浮、 堂、 芦、 厚、	浦、浮、 堂、 芦、 厚、	浦、浮、 堂、 芦、 厚、

撰、待、門、茶、往、來、の、人、に、茶、を、施、す、
焼、大、文、字、火、鳥、居、の、火、
室、町、家、繁、昌、の、日、遠、望、遊、觀、の、た、め、お、ま、せ、
一、条、通、を、正、面、と、ま、一、説、延、徳、元、年、七、月、十、六、日、相、面、
撰、川、の、尚、始、て、お、ま、せ、を、作、る、は、お、軍、義、尚、追、悼、の、意、
此、外、北、山、松、ヶ、崎、の、妙、法、の、を、と、し、舟、山、の、舟、形、の、
愛、宕、山、の、石、形、の、火、を、と、し、活、か、し、の、意、也、
在、人、麻、を、と、し、を、と、し、を、と、し、
の、意、也、
剪、紅、羅、花、の、形、刻、し、有、る、小、刀、或、ハ、鍔、を、以、て、
さ、ら、し、秋、の、花、を、と、し、教、を、と、し、
二、む、し、寺、を、と、し、珍、花、を、と、し、
寺、を、と、し、
名、所、地、名、
七、月、せ、す、
百、五、十、二、

老壽九十期願百歲

○追善之祿

初七忌初七新願全

以芳七二到彼全

洒水七三何經全

光善全

暗命七四阿經全

延芳全

法明七五小飲全

室明全

檀弘七六前至全

大飲七休新全

百期百幽回全

卒哭全

小祥一遠哭全

大祥三休安全

七霜七超祥全

遠芳十三寂語全

寂暎全

慈明十七

罔良二十

清降三十

圖滿五十

本然百

四季非嘗藏時記新集

○月見事文類聚歐陽

詹翫月詩序云月之為翫冬則驚霜大寒夏則蒸雲

大熱雲蔽月霜侵人蔽與侵俱害翫秋之於時後夏

先冬八月於秋季始孟終十五之於夜又月之中誓

於天道寒暑均取月數則蟾兔口况埃壘不流大空

悠々蟬娟徘徊博華上浮昇東林入西林肌膚與之

疎冷神氣與之清冷●名月湘東宮去東云三

五十五夜亦多●今宵の月今宵の月以上十

尤故実●今宵の月今宵の月以上十

五十五夜亦多●今宵の月今宵の月以上十

揚南記名月後祝三方●卒夜●三五之夜

杜甫仲秋詩云●月の挂花紅葉桂男西陽雜

俎月中挂竹●五百丈下一人有り●是を研る

○月見事文類聚歐陽

詹翫月詩序云月之為翫冬則驚霜大寒夏則蒸雲

大熱雲蔽月霜侵人蔽與侵俱害翫秋之於時後夏

先冬八月於秋季始孟終十五之於夜又月之中誓

於天道寒暑均取月數則蟾兔口况埃壘不流大空

悠々蟬娟徘徊博華上浮昇東林入西林肌膚與之

疎冷神氣與之清冷●名月湘東宮去東云三

五十五夜亦多●今宵の月今宵の月以上十

尤故実●今宵の月今宵の月以上十

五十五夜亦多●今宵の月今宵の月以上十

揚南記名月後祝三方●卒夜●三五之夜

杜甫仲秋詩云●月の挂花紅葉桂男西陽雜

俎月中挂竹●五百丈下一人有り●是を研る

七部集 八月 一 百六十二

敦賀祭

岡八幡祭

仲哀天皇風土記善治の神宮ハ宇佐國体ニ例祭
八月十日○今月二日より十日迄四方の放下師狂言
少等集りて真の事も
神楽の海鳥有り引山也
相承難倉之向一名雪井一々奉之勸誘を例年八
月十日放生舎有り並編馬角力等をなす也

月を好むをさるる星はさきより月差
力の如くつきり中の子時五
進也三井の末吉の流りり目業
さ体のもを酒の山く誠人
えつけたり廿九の月まむ若者
君のつゝめさむさやけ月差
とらふ方日星を回るとありて
姓のさきよりさきあきう取
類々ありまをさるるも目業
歳時記の末吉の流りり目業
まむさやけ月まむ若者
君のつゝめさむさやけ月差
とらふ方日星を回るとありて

一子をばむ書とを思ふく儲家と興ふ鄰家
大に富貴あり本家衰し後二月二日を以て取
捕も前後本家の通請書し如俗二月二日を家僕
の交代の節とするといふ元此本くう後二月二日
八月二野分 同合仲秋月盲風
野分 至注盲風疾風也 野山
の色 野原より自然くはる
うりい 野菊 菊をさるる花をさるるに菊に似
ゆい 野菊の花多し神さるる花ありとぞ是上
古より本邦にあり菊の毒あり合さるるに
さり今人家を極く野菊の外はし 之桑名
ツリ 春日大社神の社勢あり桑名の城下より野
神四座別當仏眼院の説経津主命ハ神
護景雲元年下総香取の宮より勅許も又武甕
槌命ハ正応二年八月十八日常陸國鹿嶋の宮
勅許二天兒屋根命姫大神ハ正二二年八月十
八日伊弉の宮張より勅許二の宮八月十八日を

今月の菊をさるる星はさきより月差
力の如くつきり中の子時五
進也三井の末吉の流りり目業
さ体のもを酒の山く誠人
えつけたり廿九の月まむ若者
君のつゝめさむさやけ月差
とらふ方日星を回るとありて
姓のさきよりさきあきう取
類々ありまをさるるも目業
歳時記の末吉の流りり目業
まむさやけ月まむ若者
君のつゝめさむさやけ月差
とらふ方日星を回るとありて

以て秋の月日を以て修
永仁の月日を以て修
を以て修
草の根を以て修
用とを以て修
つゝめさむさやけ月差
とらふ方日星を回るとありて
野菊の花多し神さるる花ありとぞ是上
古より本邦にあり菊の毒あり合さるるに
さり今人家を極く野菊の外はし 之桑名
ツリ 春日大社神の社勢あり桑名の城下より野
神四座別當仏眼院の説経津主命ハ神
護景雲元年下総香取の宮より勅許も又武甕
槌命ハ正応二年八月十八日常陸國鹿嶋の宮
勅許二天兒屋根命姫大神ハ正二二年八月十
八日伊弉の宮張より勅許二の宮八月十八日を

和漢三才圖會 状畫眉を以て修
眼顔の如く修
好く相親を以て修
此の如く修
時を以て修
先今を以て修

山吹の如き花は... 餅を喰つて... 山吹花の如き花は...

道加

山吹の如き花は... 餅を喰つて... 山吹花の如き花は...

春

山吹の如き花は... 餅を喰つて... 山吹花の如き花は...

山吹の如き花は... 餅を喰つて... 山吹花の如き花は...

四季 昨昔哉時已折花草

のや山の産品最佳... 葉を食ふ... 葉を食ふ... 葉を食ふ...

間引菜

見割菜 小菜 和洋二...

様子鳥

同上 四字

け毛見

記事 士民年の貢...

ふ木芙蓉

好む者... 好む者...

蒲萄

時珍曰...

蒲萄酒

時珍曰...

袋洗

山崎名産...

小望月

十四日の月...

蕙の香たうらむて別ふ人
山畑の草花成りて夕日外
好まらぬあまの夜はま
全

夏

かくも此の山は尾川
保羅まきよの流れてぬ
果有る板敷の春戸の一
遊しよのあまの橋一
若竹のうらむらうら
摩をうらむらうら
武蔵宿をうらむら

すうけり如志とゆく衣川
馬のうらむらうら
老船曰く是之足事足
夕うらむらうら

駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

駒牽 駒牽 駒牽 駒牽

秋

春の細草子
あまの夜はま
あまの夜はま
あまの夜はま

小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

小雀 小雀 小雀 小雀

繪行器

繪行器 繪行器 繪行器 繪行器

繪行器 繪行器 繪行器 繪行器

繪行器 繪行器 繪行器 繪行器

繪行器 繪行器 繪行器 繪行器

繪行器 繪行器 繪行器 繪行器

繪行器 繪行器 繪行器 繪行器

繪行器 繪行器 繪行器 繪行器

安農津祭

安農津祭 安農津祭 安農津祭 安農津祭

安農津祭 安農津祭 安農津祭 安農津祭

安農津祭 安農津祭 安農津祭 安農津祭

安農津祭 安農津祭 安農津祭 安農津祭

安農津祭 安農津祭 安農津祭 安農津祭

あまのつ子のひびき... 秋の遠き... 砂のよまの... 城下... 珍願丸... 若子十城人...

あまのつ子のひびき... 秋の遠き... 砂のよまの... 城下... 珍願丸... 若子十城人...

四季 俳諧 歳時 詠集 卷三

九月九日の節日... 鯉魚風... 九月の風... 踏門前流るる

白膠木紅葉... 九月の節日... 踏門前流るる

岡寄祭... 十五日或ハ... 十六日

豺祭獸... 九月の節日... 踏門前流るる

老母草の実... 九月の節日... 踏門前流るる

送栗... 九月の節日... 踏門前流るる

送稲... 九月の節日... 踏門前流るる

落水... 九月の節日... 踏門前流るる

あけまし... 九月の節日... 踏門前流るる

度會新嘗會... 九月の節日... 踏門前流るる

七部集 九月をわか 百七十七

彼西の上人の身より人を呼ぶるも
たつとて... 伊弉册の神を呼ぶるも
... 伊弉册の神を呼ぶるも

冬

初... 伊弉册の神を呼ぶるも

雛

伊弉册の神を呼ぶるも... 雛の宮の別

雛の宮の別

残菊... 九月日小袖... 菊襲

九月日小袖

残菊

菊襲

栲

栲

栲の神一... 栲の神一

胡桃

胡桃の神一... 胡桃の神一

の實

の實の神一... の實の神一

九年母

九年母の神一... 九年母の神一

栗

栗の神一... 栗の神一

熊栗相

熊栗相の神一... 熊栗相の神一

ほくしりハ... 伊勢山田言集... 伊勢山田言集... 伊勢山田言集...

正木 コサキ 十月... 正木の蔓。...

の実 トモ 同上... 正木の蔓。...

はてば志 ハテバシ 伊勢山田言集... 伊勢山田言集...

檀 ツグミ 伊勢山田言集... 伊勢山田言集...

ふ不堪田奏 フカシタウ 伊勢山田言集... 伊勢山田言集...

佛 ブツ 伊勢山田言集... 伊勢山田言集...

手柑 テカン 伊勢山田言集... 伊勢山田言集...

佛甲草 ブツコウサウ 伊勢山田言集... 伊勢山田言集...

緑豆引 キナンドウヒキ 伊勢山田言集... 伊勢山田言集...

御香の宮 ミカドノミヤ 伊勢山田言集... 伊勢山田言集...

御難の餅 ミカドノモチ 伊勢山田言集... 伊勢山田言集...

小倉祭 コクラマツリ 伊勢山田言集... 伊勢山田言集...

伊勢山田言集... 伊勢山田言集... 伊勢山田言集...

なりく雪川せも也雪は原

修徳の心をこころし

雪ももも徳屋の老の初断し 芭蕉

昔の屋の用をこころし

老を哀いすもはるの菴の雪を雨

雪の日は依の子をまをすうら

雪とては健あうの雪の結 卯七

雪うらそは雪の雪あうの雪ま

ま 西道平

亂の雪子二世を返しての雪ま 白

うら結も雪の雪まの雪色 蕉

結たまの雪まの雪まの雪ま

一月ま雪まの雪まの雪ま

信吉書納

雪神もも鼻息の雪の雪ま

雪雪候との雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

雪もも雪まの雪まの雪ま

四季

非 載 辨 記 行 天 草

例聖九月十五日 祭を奉し神湯の祝あり又

流籠る河を神奉り神奉り神奉り神奉り

社、遷 木橋祭 神社山城國宇治郡木

祭の神一正哉吾勝連日天恩恩母母二木橋の神社と

早も例聖九月廿日神奉り神奉り神奉り神奉り

神是也 葯葯の花 時珍曰葯葯を

を福も長二二ア名記も自ら苗を生け祀の大

木の実 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

柑子 菓物秋多くし故るを

赤小豆引

大依古用の中種を

鳥林

草

七 祭 集

九九

あ

百八十四

和名類聚 卷之六 日言新書

三然也 諸君の時

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

病後

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

ひ 賜氷魚

和名類聚 卷之六 日言新書

瓢の樹

和名類聚 卷之六 日言新書

楮

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

も 紅葉

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

紅葉衣

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

和名類聚 卷之六 日言新書

子子うらやまするをきく
みのくまうりまきまうもく
中野ししけ

あまののちれも今かち申す 芭蕉
水ま月や新銀さうぬ夕まみ 崖 業
まくららたぬまの涼しき夕か 宗次
まよしさと新まのしるる凡兆
唇く暑つくやの涼さう神し 子 形
月餅やゆの顔のくす似経 善 良
夕暮やぬまのまの雲の峰 去 東
けしめく活さく

雪のここの今のは比敷の似さあう之道 大サカ

秋

秋夜や蓮をさうらう花ゆらり ふか
は白き本よりききとあまのまきまき

こをを以てく種々の市人群集を故に室の市と云也
此書社の新書ままに五獲の車中びより沙汰は
室の市并 スミヨシ 任吉の神送 カミナクリ 九月十日接あ
市是也 任吉の神送

出所の仮殿、仮御即後を修を長を任吉(伊)菅の
較と云程細く又北祭りく縁を出雲石と云新て
縁宜出雲を遷うた スガノ 爵入大水為蛤 スガノ

并出雲を神送と云 スガノ 此記戌月之候爵為蛤 スガノ 芒散 スガノ 飛物化為酒物 九月節 スガノ 九月の節 スガノ

舊九月

無射 律 霜降 中
寒露 節

季秋、紅樹、玄月、長月、素秋、菊月、晚秋、蟻の秋、
初寒、霜月、少雨、九月、霜降、九月、

九月

白露 節 彼岸、社日、生國魂祭、
秋分 中 石上祭、

豊國祭、白草祭、井伊谷祭、秋季白草祭、秋季神
殿祭、日花祭、團懸祭、▲秋之節一終



